

今月の軽井沢

細江久美子（撮影・文）

雪降る雲場池

2022年12月号の《今月の軽井沢》では、榎本太麻子先生撮影による雲場池の素晴らしい紅葉の景色をお見せできましたが、雪の降りしきる雲場池も紅葉に勝るとも劣らない景色です。



今月の詩

ジャムをつくる

長田 弘

イチゴのジャムでもいいし、
黒すぐりのジャムでもいいな。
ニンジンのジャムやリンゴのジャム、
三色スマイレのジャムなんかもいいな。

私が眠りの森の精だったら、
もちろんネムリグサのジャム。
もし赤ずきんちゃんだったら、
オオカミのジャムをつくりたいな。

だけど、数字の一杯はいった
算数のジャムなんかもいいな。
そしたら算数も好きになるとおもうな。
いろんなジャムをつくれたらいいな。

「わたし」というジャムをつくりたいな。
楽しいことやいやなこと、ぜんぶを
きれいなおろし金できれいにしておろして
そして、ハチミツですっかり煮つめて。

みすず書房『長田弘全詩集』から

ゆあさとしお（選・文）

極私的な、長田弘にまつわる物語。

大学生になって、それまで読んでいた詩人以外に、はじめて読んだ詩集は『われら新鮮な旅人』。ひそかにノートに書きつけたのは「長田弘論」。

それをもとにして、私は彼の評論集『抒情の変革』の書評を書き、ある出版社の入社試験を受けた。その出版社は自社出版物の書評を書くことを一次選考の課題にしていた。（書評は通ったが、最終選考で選にもれる）。

私は、中・高の教員になった。私の家に何度か遊びに来ていた中学生が、書棚から抜き出して借りていったのが長田弘のエッセイ『ねこに未来はない』（この本に目をつけるなんてなかなかのもんだと思った）。

やがて彼は、大学を卒業した後、アメリカとインドを放浪し、やっとのことで帰国して、中途採用で出版社に就職する。その彼が、編集者として担当したのが長田弘だった。

長田弘の言葉には、柑橘系の果実のさわやかな甘さと苦みがある。

長田弘（おさだ ひろし）：1939–2015

福島生まれの詩人・評論家。『われら新鮮な旅人』でデビュー。代表作『深呼吸の必要』。

子どもの書道教室事情

赤藤和仁（東京成徳高校）

18歳。大学で書道を学びたいと北海道から上京した。中央書壇で活躍している先生方が大勢いらっしゃる大東文化大学に入学。入学後気づいたのは、大学で教わることはわずかなことで、それぞれに師を探して4年間そこをよりどころに深く学んでゆく。300人在籍している書道部は、書壇の縮図だった。多くの先輩、友人から刺激をたくさんもらった。そのことが大切だった。

私は、郷里の先生と相談して目白にお住まいの金子卓義先生にお世話になることにした。大学の先生ではないが、そこには学生が地方から40名以上集まって研鑽をしていた。4年生になると週4回は師匠のもとに通っていた。内弟子ではないが、目習いすることも多く書以外の事で教わった事が指導者になってから役に立った。

金子先生の奥様が、小中学生を相手に書道教室をしておられたが、大学4年生の誰かが助手をすることになっており、私も1年間お邪魔することになった。私の小学生の頃は、田舎だったせいかわ習い事は習字とそろばんぐらいだったように思う。習い事が日替りで忙しい生徒や、複数の私立小学校の生徒も制服を着て習いに来ており、やはり都会だなあと考えたものだった。

昼過ぎから、掃除をして準備をしていると、2時過ぎには小学校1・2年生が来る。一枚目は私と一緒に筆を持って書くのが通例。Hさんとは、学校であったことや、家での事など話をしながら。ファミコンの話をしたら止まらなくなるTくんもお父さんになっているのかな。鼻水を垂らしながら書いていたMさんは、よくお姉ちゃんの話をしてくれた。子どもと話しながら私も癒やされていた。

3時過ぎると、ギャングエイジの3年生が来る。先生のお嬢さんの同級生が多く賑やかだ。何をすることも反抗的な双子の姉妹もどうしているのかなあ。時々思い出す。

夕方になると、高学年、中学生の生徒が来るが黙々と10枚は書く。長年通っているのだと思うが、教卓での添削指導の際の奥様の声かけも親しみがある。すべて個別指導であるが、○付けはその子の様子に合わせて行っているようだった。他人との比較はまるでなく、その生徒の個性を伸ばすべく一枚一枚に朱筆を動かしその声に愛情がこもっている。良くできた作には大きな○の横に「よし」が添えられる。100枚集めると、よいことがあるとか。清書に氏名を書いて提出すると、おやつがもらえたりするのだが子どもたちはそれも楽しみにしていた。

最近指導されている方によると大きく変わる事情はないようだが、発達障害の生徒もいて対応に苦慮する事もあると伺う。そういえばかなり落ち着かない1年生がいて手を焼いたことも思い出す。コロナ禍の中、ZOOMでやりとりをしたりした報告もあり、密にならないために学校とは違う工夫もある。

何もかも忘れて筆を持って字を書く。習字が好きな生徒にとってはそのことにも癒やしがあると思う。学校と違い長年習った先生との関係が続くことも魅力的なことだと思う。友達とのそれとは別に、学校でのことや、愚痴をちょっと話せる書塾の先生は多いのではないだろうか。

私も、あと1年で退職である。近所の子どもたちとコミュニケーションを楽しむチャンスを期待している



千葉市中学校特別支援学級合同予餞会に参加して

高田茂子（[千葉市立真砂中学校](#)）

1 はじめに

「今年の合同予餞会はオンラインかな？」

昨年4月、特別支援学級3年生の男子生徒に質問された。千葉市に転勤したばかりで初めて特別支援学級の担任となり、「合同予餞会」がどのような様子なのか想像できずに「コロナがどうなるかだね。」と答えた。

令和5年2月2日「第40回千葉市中学校特別支援学級合同予餞会」が千葉市民会館において、会場発表とオンライン発表のハイブリット型で開催された。3年ぶりの会場発表となり、3年生にとっては中学校生活最初で最後の大きな発表の場となった。

2 千葉市における特別支援学級の交流行事

本年度千葉市の中学校特別支援学級で行われた交流行事は、6月「げんき交流会」、11月「げんきキャンプ」、そして今回の「合同予餞会」の三つだった。それぞれ、スポーツを通じて他校の生徒と活動したり、宿泊を通して仲間作りをしたりした。「合同予餞会」では、中学校3年生を送る会として、各学校がそれぞれ趣向を凝らした発表を行った。

ここ3年間は行事が縮小されていたが、今年になり「げんき交流会」と「合同予餞会」は実際の会場とオンラインのハイブリット型で開催され、「げんきキャンプ」は千葉市少年自然の家に一泊した。宿泊を伴う行事では、教員同士の情報共有が重要であり、オンラインでの会議が続いた。以前は集まって話し合いを重ねていたようだったが、移動時間が短縮となったものの、詳細に伝えきれないこともあり、また3年ぶりの開催ということで、電話やメールのやりとりが頻繁に行われた。

3 本校の特別支援学級の体制

本校の特別支援学級に在籍する生徒は22名で、3学年が一つの教室に集まり、朝・帰りの学級活動を行っている。教員は4名で随時情報交換を行いながらきめ細かい支援体制を築いている。授業は教科や学習内容によってクラス別で展開されたり、22名が一緒に学んだりしている。

8:10から「朝トレ」と言われるトレーニングの時間がある。グラウンドで生徒を待っていると「先生、おはようございます。」と生徒は手を振って元気に挨拶してくる。5分間各々のペースでグラウンドを走るのだが、学年を超えて競い合ったり励まし合ったりする姿は清々しい。本校の特別支援学級の一日はこうして始まる。

4 トーンチャイムの演奏

「トーンチャイム」という楽器をご存じだろうか。[鈴木楽器製作所のホームページ](#)には次のように記されている。

トーンチャイムは普及型のハンドベルとして開発した楽器ですが、その美しい余韻と柔らかく心に沁み入るような音色は、ハンドベルとはまた違った魅力を持った楽器として愛されています。

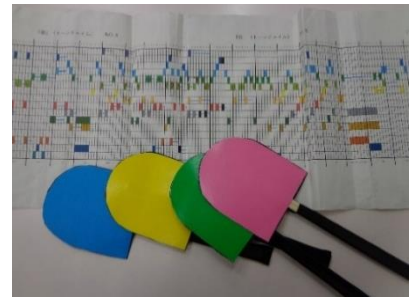
トーンチャイムの魅力は、音色だけでなくその演奏法にもあります。みんなが簡単に楽しめる楽器。でも、みんなの力が必要な楽器。トーンチャイムは、ひとりでは演奏できない楽器なのです。ひとりひとりが自分の音を担当し、グループ全員が一つになった時に、素敵な音楽になります。美しい音色をみんなで共有し、ひとつの音楽を創り上げることで、それぞれの個性や感性を育み、新しい感動をおぼえます。

演奏愛好家をはじめ、学校教育・教会サークル・各地の養護施設などで広く活用されています。幼児から中高年の方々までトーンチャイムの素晴らしさをぜひ体験してください。



本校で使用しているトーンチャイム

私はハンドベルの演奏をした経験はあるが、トーンチャイムという楽器は知らなかった。昨年のビデオを観て、美しい音色の重なりと拍をとりながら真剣な表情で演奏する生徒の姿に感動した。本年度の演奏曲は日本の音楽デュオ「コブクロ」の『蕾』に決定し、早速音楽科教員による楽譜作りが始まった。楽譜は写真で示すように、音階が色分けされ、「1と2と3と4」と8拍に分けて音を鳴らすようになっている。教員が集まって練習する中、途中でどこを演奏しているのか分からなくなったり、間違っただけの音を鳴らして不協和音が響いたりすることもあり、22名に教えられるのか不安になったが、無事に生徒に聴かせるための録音を終えた。私は高音のメロディーを演奏する生徒を担当し、合図が必要な生徒には、色分けした指示棒を出して支援をした。まさに生徒と教師の強い絆である。



『蕾』の楽譜と指示棒

昨年10月に本校の合唱コンクールが開催され、クラス合唱とトーンチャイムの演奏を披露した。千葉県文化会館の隅々まで『蕾』の美しい音色が響き渡り、多くの生徒や教員から「すばらしかった」と声をかけられた。保護者も感動していた。

練習を定期的に重ね、千葉市中学校特別支援学級合同予餞会では、できる限り指示棒なしで演奏することができた。

5 「第40回千葉市中学校特別支援学級合同予餞会」

会場である千葉市民会館はJR千葉駅から徒歩7分の距離であるが、生徒が自分達で集合場所に来るように事前学習をした。生徒の居住地域が広いので、集合場所を2か所に設定し、休日に公共の交通機関を使って下見をするように保護者に協力を仰いだ。

当日、約束の時間に集合できるか少し不安だったが、無事集合して会場まで歩いた。多くの参加者で混雑する中、本校の教員が手を振っているのを見付け、生徒は「〇〇先生がいる。よかった。」と言って手を振り返した。保護者と一緒に来場した生徒も合流できた。

第2部の発表では、劇やダンスであったり、琴やドラム、トーンチャイムの演奏であったりと、笑いあり、手拍子あり、そして聞き入る場面ありと、どの学校もすばらしい発表だった。

本校の発表は午前中の早い時間だった。薄暗いステージにトーンチャイムを握りしめ入場してきたが、暗くて前日貼った目印テープが分からなかったようで、なかなか定位置につけなかった。男子生徒が曲紹介をし、ステージ下で丸を作って合図した。演奏は最初の音を担当している2名の生徒の「1と2とせーの」という掛け声で始まった。途中で1名の生徒のねじが外れて音が出なくなってしまうというハプニングもあったが、演奏を終えた生徒の笑顔はいつも以上に輝いていた。

午後にはオンラインでの発表があり、ボディーパーカッションやサイエンスショーなどもあった。生徒数は1名から本校のように10名以上のグループまで様々であり、教員と一緒に出演したり、リーダーを中心に協力して演じたりするなど、各学校が生き生きと発表した。

第3部では『きみとぼくのラララ』を合唱して閉会した。充実した一日だった。

6 おわりに

活躍の場はこれだけに留まらない。3月1日(水)には「校内予餞会」を予定し、学級内でダンスや劇、パワーポイントの発表、プレゼントの贈呈など、一人一人が主役となって活躍する。3月2日(木)には、全校行事「3年生を送る会」があり、学年の活動として他クラスの生徒と一緒にトーンチャイムで校歌を演奏したり、ちぎり絵を完成させたりする。一人三役以上もこなす多忙な生徒もいるが、どの生徒も活気に溢れ、意欲的に活動している。

学習指導要領総則の中で「生きる力」は、『ア「何を理解しているか、何ができるか(生きて働く「知識・技能」の習得)」、イ「理解していること・できることをどう使うか(未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成)」、ウ「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか(学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養)」の三つの柱』と明記してある。

初めて特別支援学級を担当し、生徒の「生きる力」を感じた。これからも子ども達と共に学び続けていきたいと思う。

人権の保障とソーシャルインクルージョンについて

市原 潤（元長野県立高校長）

人は生きていく限り様々な困難や苦難に出会う。LGBT 法案について、「社会が変わってしまう」と発言した官僚が更迭された話は耳に新しい。確かに「社会は変わる」だろう。法や技術には歴史的な段階が存在する、だが、人と人の関係の深さはどんな時代にも、また「障害」の有無を超えて存在する。

法や正義も決して完全ではないし、科学や技術は進歩をその本質とする。しかし、人は、よりよい善を求めて、ときには、その時代の法や正義、常識を超えて、或いはそれに反して行動することもある。友愛や隣人愛、慈悲の心から生まれる行動が、人とその社会を根底で支えている。法も正義も人間の善や美を求める感情をその基盤とするものにほかならないからだ。

■人権の拡大

たとえば、女性選挙権も歴史のなかで戦いによって獲得されたものだ。世界で最初に女性参政権が制定されたのは、ニュージーランドで 1893 年、次いで 1902 年のオーストラリア。議会政治の国といわれるイギリスは 1918 年だった。右はイギリスで女性の参政権獲得を訴えるためのポスター。当時の人々の熱望と過酷な政治状況を物語る史料である。



<https://www.bbc.com/japanese/features-and-analysis-42971614>

20 世紀初頭、女性参政権のためのポスター（イギリス）

左：投票権をもつ男性と、手漕ぎボートの女性
右：女性参政権を主張し、刑務所に入れられ、ハンストをしている女性への強制的な栄養補給

◆人権・平等という理念と現実

ヨーロッパ近代の「社会契約論」¹では、国家は神聖不可侵なものではない。なぜなら、国家は人間によって造られたものだからだ。しかし、また、個人を越える力が存在しなければ、人々の間の争いも戦いも止まない、「人は人に対して狼」だからだ。この戦いを終わらせるためには、個人を超える力・権力が必要だ。権力の所有者の数によって王政、共和政、民主政という異なる政治体制ができる。そうやって生成する国家権力に人々は自らの戦う権利（自然権）を委ねることによって、争いが終結する。現実存在する王政も可能な政体の一つに過ぎない。

しかし、ひとりひとりの人間のもつ「力」は決して一様ではない。ロールズ²は、「原初状態」「無知のヴェール」（人は自分を全く知らないという仮定）を設定することによって諸制度を構築する「公正としての正義」を主張した³。ロールズの「格差原理」によって、アメリカ社会の人種間格差、男女の格差は改善されていったが、しかし、差別される人々も格差も現実の社会のなかには存在し続けた。必ずしもすべての人々が、自己の権利を主張するための実際的な力を持っていたわけではなく、「協議」の場にさえ参加できない人々も存在した。例えば、かつてのアメリカ社会の黒人たち、国際社会における所謂「南」の国々、明治初期の女性は家制度においては「戸主」になれなかった。

障害をもつ人々には、その程度と種類によって、依然として厳しい状況が存在している。

¹ たとえば、ホブズ『リヴァイアサン』1651年

² ジョン・ロールズ(アメリカ 1921-2002) 倫理・政治哲学者 主著『正義論』1971年

³ 自分がどちらの側に属しても不利にならないように予め定められたルール。

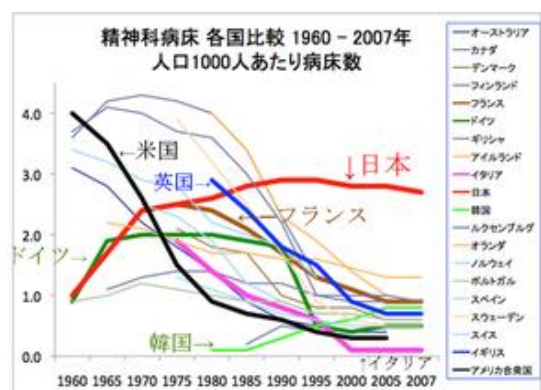
◆権利についての新しい考え方

ヨーロッパ近代に淵源する人権という権利は、その前提として、人権を主張する個人の能力と機会の平等という考え方に基づいている。みな同じ能力を与えられ、同じスタートラインに立っている、あとはその人の努力だ、というわけだ。ロールズの「無知のヴェール」と「格差原理」は、この前提に立って、スタートラインや物差しの修整を計るものだった。科学技術や社会体制の開発・変革によって、大きな変化もあった。しかし、なお、現実の貧困や不平等の回復には測りえないほどの格差が明らかになったのが 20 世紀の世界だった。

◆アマルティア・セン (1933-、インドの倫理学者・経済学者) は、正義 justice を公正 fairness と考え、公正のための条件を正義のために戦う身体的・精神的可能性 capability だと考えた。彼は、「国連開発計画」に携わり、人間開発指数 HDI を考案し、2001 年から 3 年間「人間の安全保障委員会」の議長として活動した。1998 年、ケイパビリティ (潜在能力) アプローチの開発によって、ノーベル経済学賞を受賞した。

◆マーサ・ヌスバウム (1947-、アメリカ、哲学者、アマルティア・センの共同研究者) は、人権を人間の身体的・精神的可能性 (central human functional capabilities) という 10 の実質的で具体的な「能力のリスト」として提起した。10 のリストは次の通り⁴。

- ①生命：通常長さの人生の終局まで生きられること。……
- ②身体健康：これにはリプロダクティブ・ヘルスが含まれる。適切な栄養を摂取しうること。適切な住居に住みうること。
- ③身体不可侵性：場所から場所へ自由に移動できること。暴力的な攻撃から安全でありうること。これには性的暴力と家庭内暴力が含まれる。性的満足の機会と妊娠・出産のことがらにおける選択の機会とをもつこと。
- ④感覚・想像力・思考力：感覚を用いることができること。想像し、思考し、論理的な判断を下すことができること。これらのごとを「真に人間的な」仕方で、つまり適切な教育……によって情報づけられかつ涵養された仕方でなしうること。……
- ⑤感情：自分たちの外部にある物や人びとに対して愛情をもてること。私たちに愛しケアしてくれる人びとを愛せること。そのような人びとの不在を嘆き悲しむことができること。概して、愛すること、嘆き悲しむこと、切望・感謝・正当な怒りを経験することができること。自らの感情的発達が恐怖と不安によって妨げられないこと。……
- ⑥実践理性：善の構想を形成しかつ自らの人生の計画について批判的に省察することができること (良心の自由と宗教的式典の保護を含む)。
- ⑦連帯 A 他者と共にそして他者に向かって生きうること。
B 自尊と屈辱を受けないこととの社会的基盤を持つこと。
- ⑧ほかの種との共生：動物、植物、自然界を気遣い、それらと関わりをもつ動物、植物、自然界を気遣い、それらと関りをもって生きることができること。
- ⑨遊び笑うことができること：遊ぶことができること。レクリエーション活動を楽しむことができること。
- ⑩自分の環境の管理
A 政治的な管理 自分の生を律する政治的選択に実効的に参加しうること。
B 物質的な管理 財産を維持することができること。……仕事において、人間として働き、実践理性を行使しかつほかの労働者との相互承認という意義のある関係性に入ることができること。



厚生労働省資料

<https://synodos.jp/opinion/international/18272/>

4 『正義のフロンティア』 p.90 ~ 92, 法政大学出版局 2012 年

■イタリアの人権保障：ソーシャルインクルージョン

◆精神科病床の廃止、地域医療の充実⁵

イタリアでは1960年代以降、広く世界に拡大した公民権運動のなかで、精神医療の地域化、精神病棟の閉鎖が進められ、世界に先駆けて精神科病床の削減・廃止が進められた。

◆学校教育におけるソーシャルインクルージョン⁶

イタリアでは全ての子どもが障害の有無にかかわらず同じ教室で同じ学習をする。そのためのスタッフ、環境はすべて学校(自治体)で用意され、そのための保護者の負担はない。

5 ジル・シュミット、半田文穂訳『自由こそ治療だ イタリア精神病院解体のレポート』社会評論社 2005年
大熊一夫『精神病院を捨てたイタリア 捨てない日本』岩波書店 2009年

6 藤原紀子「イタリアにおけるインクルージョンの変遷と1992年104法」世界の特別支援教育 24 67-77, 2010-03
一木玲子「イタリアにおける障害児のインクルージョンの一事例」教育制度学研究 2005 (12), 258-264, 2005

近況報告

○ 中村文隆

私は埼玉県の久喜市に住んでいますが、ここ数年は体調を崩し入院や手術、そしてコロナ禍も重なり 3~4 年程外出する気力や体力もない日々を過ごし、ようやくスキーに復帰するまでになりました。

体育教師としてスタートし熱血硬派教師として正義を御旗の印に自己満足だけの独り善がりのダメ教師だったと、ゴールが見える今頃ようやく反省しています。そうした中でも時折は 50 歳過ぎた子どもから連絡があったり訪ねて来る事もあって心が救われます。子どもや保護者の気持ちにもっともっと深く寄り添い歩みたかったと正直に振り返っています。僻地教育から始まり東京で一番若手の校長として荒れた学校を立て直すのが使命と改革に取り組む頃に妻の癌が見つかり、約 10 年間、転移や再発、手術、抗がん剤、入退院を繰り返して亡くなりました。その後、国士舘大学の客員教授になった頃、家内の遺品の中から陶芸作品を見つけ私も挑戦しようと陶芸をはじめ、今ではライフワークになり、妻が残してくれた最後で最大の贈り物だったと心から感謝しています。幸い拙宅は自然に恵まれた環境で現在は陶芸工房で教室をしています。春先はウグイス、メジロやカッコウ、キツツキ、四十雀が巣作りをして雛鳥が飛び立つ姿も見られるし、かぶと虫がいる素晴らしい環境です。今は明治元年築の納屋蔵をリノベーション中で、この後はギャラリーとカフェそして、子どもの農業体験、不登校や障害を抱えた子どもや保護者が安心して集い、楽しく陶芸や接客を学んで自立へ繋げるコミュニティエリアに発展させ次の世代に引き継ぎ、来世ではもう一度亡き妻と結婚し教師をしたいという叶わぬ夢を見続けています。

○ 萩原 裕美 (船橋市立葛飾小学校)

外国ルーツの子供たちの困難について、2021 年 9 月号の実践報告後も、引き続き日本語指導担当として、様々な国から来日した多くの子供たちと共に学び続けております。新しい出会いの度思い知るの、一人ひとり言語や文化だけでなく背景も個性も興味も全く異なり、支援の仕方も工夫しなければならない、という当たり前のことです。日本人の両親の下で育つ子供たちも当然、豊かな個性と背景を持っていますが、外国ルーツの子供たちは言語と文化だけでも背景が複雑化し、困難さを極めるということ、多くの先生方に知っていただく必要があると痛感しています。

さて、9 月号で報告した子供たちのうち、日本語が不自由な保護者の下で育った A さんは、当時、座っていることすら困難でしたが、現在は、1~2 学年下の漢字が読めるようになり、得意の折り紙などで周囲の友達と関われるようになってきました。背景の複雑さから学習用具は整わないなどの課題はありますが、日本語教室で支援しています。B さんと C さんは、その後まもなく転校し、転校先からがんばっているとお便りがありました。この間の一番大きな変化は一人 1 台タブレット端末が支給されたことです。外国ルーツの子供たちにとって大きな支援となっています。

私自身は今年度 60 歳で定年を迎える最後の世代ですが、今後もできる限り長く子供たちの支援に関われるよう、子供たちと学び続ける所存です。

○ 榎本太麻子（二期会オペラ歌手）

定例会に、なかなか参加できずに、皆さまにご無沙汰しており申し訳ございません。

このところ家族のことでバタバタしております。昨年度大晦日に、母（91）が部屋の中で尻餅をつき、大腿骨骨折で救急車。お正月から手術。2週間ほどでリハビリ病院に転院。初日の検査で別の病の疑いに引っ掛かり、主治医の説明では、決して楽観視できるものではなく、生検の結果が出るまで緊張の日々でしたが、幸いにも心配いらぬものでした。嬉しいことに、母は、60代70代くらい、しっかりしていると、担当医からの太鼓判も頂戴致しました。

コロナがまだ落ち着きませんが、仕事は、コンサートも増えてきています。今年の2月から、帝国劇場を皮切りに全国公演のミュージカル『レ・ミゼラブル』も3年ぶりに一般公募オーディションが始まっています。まずは、歌っている姿をYouTubeで提出します。『レ・ミゼラブル』のオーディションは、例年、全国から14000人も受験者がいて、40名程の合格者です。コロナでストップしていた3年ぶりの今回は、どんな変化があるか興味深いところです。また、私の関わる東京成徳大学の幼児教育、初等教育の音楽実技の授業は、すっかり対面に戻っておりますが、オンライン授業でスタートした学生に対しての指導方法は、新しい工夫も必要と常々感じております。

句会 むさしの

○^{ねほんにし}涅槃西風鎖時計の重きこと

安田 勝彦

初午や坂の都電の軋む音

福引の棚の特賞黒うさぎ

3月は春たけなわの頃となりますが、冬の終わりと春の始まりを告げる風が涅槃西風です。そして、初午から二の午と春の訪れが感じられるこの頃です。私の街の近くに落語などで有名な王子稲荷があります。その近くを東京でただ一つの都電が走りちょうど飛鳥山の坂を上る光景と重なります。福引は新年の季語ですが、友人が福引で今年の干支のうさぎを当てたと言って飼っています。うさぎも懐き可愛がっている様子と福引という取り合わせを一句にしました。

○争いは人の世にあり二月尽

市原 潤

戦争の理由は後で気づけば「妄想」に近いものだ。地元の招魂社の拝殿脇に「凍傷者カアヤンカアヤンと呼びて逝く」と刻まれた石碑が建てられている。醒めれば悲傷感だけが残るが、相手は一層深い傷を負ったにちがいない。

○夫婦してコロコロコロナ冬ごもり

上島 博

春隣舞台の子らの得意顔

とうとうコロナにかかってしまいました。ワクチンを済ましていたし、発熱外来でも丁寧に対応してくださったので、安心できました。今は、抗コロナウイルス薬もできていて、熱も早く下がりました。3年前からたくさんの方が亡くなったけれど、人々が叡知を合わせて、ご苦労してくださったおかげで生き延びることができました。家で籠ってメールを見ていたら、深谷先生方のコンサートレポートがあり、様子を想像しながら2句目を作りました。

編集後記

12月号 {風の便り} は、体調不良で上島先生に大変ご迷惑をおかけしました。少しずつ回復はしておりますが、ホームドクターによると「僕の患者で、胆管炎（胆嚢炎でなくて）にかかった人は、深谷さんが初めて」とか。食欲も回復して来ておりますが、今月も上島先生やその他の皆さまに大変お世話になりました。3月号は、とりわけ色とりどりの写真が挿入されており、本当に楽しめる誌面となりました。イベントがあると、またレストランでも、皆さんのスマホが林立しているのをみると、自分はもう過去の人だなあと落ち込んでしまいます。それだけに、巻頭のゆあささんの名詩のご紹介の欄を見ると、金魚？がエサを貰ったかのように、自分を取り戻す感じがします。6月号発行の頃には、もう少し生きのいい編集後記を書けることを念じています。引き続き、「風の便り」のご愛読を。

(深谷和子：kazukofukaya@nifty.com)

〈編集委員〉

深谷和子（長）・上島博・湯浅俊夫・清文枝・土田雄一・大高志芳・吉野真弓・細江久美子

〈「風の便り」 2023年3月号目次〉

今月の軽井沢 雲場池	細江久美子
今月の詩 「ジャムをつくる」長田弘	ゆあさとしお
実践報告1 子どもの書道教室事情	赤藤和仁
実践報告2 千葉市中学校特別支援学級合同予餞会に参加して	高田茂子
子ども研究ノート 人権の保障とソーシャルインクルージョンについて	市原潤
会員談話室	
近況報告	中村文隆・榎本太麻子・萩原裕美
句会 むさしの	安田勝彦・市原潤・上島博
	編集後記 (深谷和子)